

「過渡性」における御言葉の沈黙
—聖土曜日朝課の「カノン」を中心に—

秋山 学

1. 本稿の位置

本稿を執筆するにあたり、筆者は同時期に、関連するテーマで論文を他に3本したためている。それは次の3点である。

1】 「「エルサレムの朝課」をめぐって—「エンコーミア」を中心に—」『文藝言語紀要』（言語篇）80, 2022（秋山 2022a）。

2】 「ビザンティン典礼の構造と喜劇詩人アリストファネスの「ビザンティン三部集」—夜半課の祈禱を基点に—」『文藝言語紀要』（文芸篇）81, 2022（秋山 2022b）。

3】 “A Process of Reconciliation: An Interpretation of Aeschylus’ “Byzantine Triad” in consideration of the theological background around that time”, presented in the International Online Conference by the Ivane Javakhishvili Tbilisi State University, Institute of Classical, Byzantine and Modern Greek Studies, 2021.09.24 (Akiyama 2021b)。

発表および刊行予定の時期に関連して付言するなら、1】と2】については、大学の紀要が従来9月末と翌3月末における2度の刊行であったものが、2021年度には合本による年度末刊（3月）となったため、1】の公表が約半年遅延したもののその間に加筆を行っている。一方3】は、2021年9月下旬におけるグルジア古典学会での口頭発表（オンライン・ズーム形式）を経て、同12月末締め切りで投稿したものである（査読中のため採否は未定；何らかの形で公表を予定）。したがって論文の内容から言えば、本稿（4】とする）を含めた4本の論文は、ほぼ同時に並行して執筆されている。題目からほぼ推測が可能であろうが、1】と4】はビザンティン典礼による聖土曜日の朝課に見られる神学、3】と2】は、それぞれ古代ギリシア悲劇・喜劇詩人の作品を写本伝承史上に置いた際に、典礼神学との関わりがいかなる点に認められるかという問題、についての考察ということになる。2】3】については、時系列的に3】⇒2】の順であるが、その内容については、本稿の中で少しく触れる。

ビザンティン典礼の式次第について、本邦でその詳細に通じることは極めて困難である。しかしながら、ギリシア教父文献学そしてギリシア教父哲学・神学の研究に携わる上で、ビザンティン典礼のかなり細部に至るまで、その知識を得ておくことは不可欠だと考えられる（秋山 2021）。筆者は、このような中世思想研

究におけるビザンティン研究の意義のみならず、古代ギリシアの古典文献万般に関して、その伝承に携わったのがビザンティンの修道士たちであったという事実を鑑み、劇作品などいわゆる「文学」文献に対しても、彼ら修道士たちが拠ったビザンティン典礼、特にその根幹とも言うべき夜半課、ないし復活の秘義を記念する朝課のうちに、自らの眼差しの基点を置くことに努めてきた。つまり最近の筆者の研究は、ビザンティン典礼の核心部（典礼神学）と、その発露（文献伝承）の関係をめぐり、それら相互の交渉をめぐって行われてきたということになる。

さてこれらを承けて執筆される本稿は、前出の拙稿【1】が聖土曜日の朝課（「エルサレムの朝課」）の次第に関して、その前半部を伝えるという内容に留まったのに対し、その後半部の中心となる「カノン」の訳出をベースに、その前後に認められる比較的短い祈禱句に着目しつつ、「聖土曜日」という時空間の本質に迫ろうという試みである。ビザンティン典礼に見られる主な祈禱句のうち、「トロパリオン」「コンタキオン」「テオトキオン」が三つ組を形成し、これがギリシア悲劇・喜劇の伝承史における「ビザンティン三部集」という形式の基盤となったという見解は、拙稿【3】および【2】で展開したものである。本稿【4】もその拙見の延長線上にあるが、結論を先取りするならば、本稿で取り上げられる諸祈禱句は、必ずしも形式的にこれら「トロパリオン」「コンタキオン」「テオトキオン」といった名称を得て唱えられるものではなく、むしろ、後 5-6 世紀に全盛を誇ったこれらの詩形式に取って代わる形で 7-8 世紀に栄えた「カノン」部の前後に配され、現在に伝えられている。したがって本稿では、「カノン」をも含め、父・子・聖霊という聖三位一体のかたどりのうちに伝わるこれら詩形式の全容と意味を探りながら、第 2 位格である「子」が安息のうちに、翌復活の主日までの過渡的時間を過ごすという聖土曜日の特質に迫ってみたい。

2. ビザンティン典礼における受難節の理解

ビザンティン典礼において、復活に先立つ受難の期間に用いられる典礼書は『トリオディオオン』（「三歌経」）と呼ばれるが、現行の『トリオディオオン』を見る限り、この典礼書は「トリオディオオンI」「同II」「同III」「同IV」の四部に分かれている（第 4 部は便宜を図っての付録）。そして第 1 部と第 2 部の境界は、いわゆる「大斎期間」の開始時、すなわちビザンティン典礼における「乳断ちの主日」と、その翌日の月曜日の間に置かれている（Orosz 1998:125）。

ビザンティン典礼の「大斎期間」としては、西方ローマ典礼教会における受難節と同様に 40 日間が設けられているが、その計日のあり方が東西間で異なる。西

方教会では、よく知られている「灰の水曜日」から受難の 40 日間が始まり、毎日曜日（主日）を除いて 40 日を数えるため、 $4 (=水, 木, 金, 土) + 6 \times 6 = 40$ となり、受難節中の主日は計 6 週を数えることとなって、主日の復活に先立つその直前の土曜日すなわち聖土曜日が受難節の末日となる。これに対してビザンティン典礼では、大齋期間中でも土曜日あるいは日曜日をさしあたり特別扱いすることはなく、40 日間を通して計算する。その際、西方典礼における「灰の水曜日」と同じ週、それに先立つ月曜日が上述の「乳断ちの主日」の翌月曜日に相当し、この日より「大齋期間」が始まる。すなわち大齋期間中は、月曜日に始まり日曜日に終わるという 1 週間のサイクルが顕著であり、この結果 $7 (=月曜 \sim 日曜) \times 5 + 5 = 40$ であるため、大齋期間中の日曜日は計 5 週となる（これら 5 度の主日には、年間通常の聖ヨハネス・クリュソストモス典礼ではなく聖バジル典礼が執り行われることにより、非日常性が記憶される）。そして大齋第 6 週は、月～金の 5 日間をもって大齋期間全体が終了し、その末日は「ラザロの復活の土曜日」に先立つその前日の金曜日ということになる。つまり、「ラザロの復活の土曜日」は、「枝の主日」すなわち受難週間の始まりを画す日曜日に先立つ日であるが、この土曜日は「ラザロの復活」を通じて主の復活を予表的に記念する日であるとともに、大齋期間が明けたことを表す日でもある。ちなみに先述の「トリオディオ

ン」第 2 部と第 3 部の境界は、「ラザロの復活」の翌「枝の主日」の朝課と聖体祭儀の間に置かれている。

このような次第をめぐって、西方教会が復活の前日までを受難節のうちに含むのとは異なり、東方ビザンティン典礼では、「ラザロの復活」から始まり「枝の主日」「聖月・火・水・木・金曜日」そして「聖土曜日」に至る 8 日間が、受難節の頂点を成すと同時に、大齋期間を既に脱しているという点において、これに続く復活節をも予表するという、ビザンティン典礼特有のいわば「過渡性」とでも表現すべき理念をよく体現した時空間となっている。この点は、受難節の終了が即復活に他ならないという西方典礼に比して、極めて対照的である。

さて本稿では、「ラザロの復活」から「聖土曜日」に至る 8 日間の最終日となる聖土曜日の朝課に関して、朝課の中核部を構成する「カノン」を中心にその典礼神学的特徴を考えてみたい。聖土曜日の朝課には古来「エルサレムの朝課」という別名が冠せられている。その前半部、すなわち詩編第 119 (118) 編およびこれとともに交唱される「エンコーミア」という讃歌を中心とする部分については、すでに訳出と解説を終えた（秋山 2022a；上掲 1】）。本稿では、この前半部に続く「カノン」部の訳出と考察を行うことになる。

上述のように、ビザンティン典礼における「大齋期間」は、「乳断ち後最初の月曜日」に始まり、「ラザロの復活の土曜日」に先立つ金曜日に満了するのであるが、「ラザロの復活」の日の朝課における「カノン」は、すでに「3歌」(=「トリオディオオン」)構成を脱し、「第1・3・4・5・6・7・8・9歌」構造に復している。これは、遡って「乳断ちの主日」の朝課、および大齋期間中の5度の日曜日における朝課の構造と同様である。結局「3歌」構造は、狭義には「大齋期間」の40日間中の週日にのみ適用されるものだと言える。

語釈を加えておこなうならば、「カノン」は計9歌(旧約計6歌、旧約続編計2歌、新約1歌)より成る。すなわち第1歌以下、順に

- 1) 出エジプト 15 : 1-8
- 2) 申命記 32 : 1-43
- 3) サムエル記上 2 : 1-10
- 4) ハバクク書 3 : 2-19
- 5) イザヤ書 26 : 9-20
- 6) ヨナ書 2 : 3-10
- 7) ダニエル書 3 : 26-45, 52-56
- 8) ダニエル書 3 : 57-88
- 9) ルカ福音書 1 : 68-79

という、聖書中に載る計9個の歌と主題が基礎に据えられ(第2歌については、内容面その他を考慮して大齋期間中にのみ用いられる)、これら聖書箇所を基点に、そこから自由に神学的観想を展開させてでき上がった詩句「トロパリオン」が、ふつう3つないし4つ、9つの各「歌」に含まれるというものである。各「歌」の冒頭には「エイルモス」と呼ばれる導歌が冠せられる一方、各「歌」の末尾には、通例「カタヴァシア」と呼ばれる締め歌が歌われる。イヴァンチョー・イシュトヴァーン師による名著『ギリシア・カトリック典礼学』(Ivancsó 1999 : 242-243)には次のように記されている。

「カタヴァシアは、緊密にはカノンに属していない。というのも、年間には通常、ここで聖母の崇敬のための歌が歌われる一方、大記念日の前には、記念日のカノンのエイルモスがカタヴァシアとして用いられるからである」。

カノン中の計9つの歌のうち、大齋期間中は月曜日に第1歌、火曜日に第2歌、水曜日に第3歌、木曜日に第4歌、金曜日に第5歌、土曜日に第6および第7歌が用いられる。第8および第9歌は毎日用いられるため、それ以外の一歌(土曜日には計二歌)とあわせ、大齋期間中の週日には計「三歌」(土曜日には「四歌」)

が用いられるということになる。本稿冒頭に見た『トリオディオオン』（「三歌経」）は、この「大斎期間」を中核（すなわち同第2部）として構成されているわけである。

なお、ハンガリーのギリシア・カトリックにおける「エルサレムの朝課」の実際については、ユーチューブによる貴重な録画が以下の URL より視聴可能である；<https://www.youtube.com/watch?v=GT0RZYal99w>（2022年1月10日最終閲覧）。時間短縮のため多少の省略はあるが、全体の構造と骨格については、非常に明瞭に理解することができる。

3. 通常の主日朝課と祝日朝課の構造

イヴァンチョー・イシュトヴァーン師によるもう一つの名著、『ギリシア・カトリック教会の典礼』（Ivancsó 2000 : 112-121）には、主日朝課、祝日朝課、週日朝課の次第が記されている。これら3種の朝課は、相互に少しずつ次第が異なり、また祝日が主日に重なる際にも細目が異なる。聖土曜日は主日に重なり得ないため、必ず週日の祝日扱いとなる。ところが聖土曜日は、翌日に復活の主日を控えていることにより、復活讃歌が歌われるなど、そこには既に復活を眼差しのうちに据えた側面も散見される。以下、主日朝課、続いて祝日朝課の次第を表にして示す。

【主日朝課】（これをAとする）

- 1) 初めの祝福。
- 2) 「天のいと高きところには神に栄光」×3。
- 3) 「6つの詩編」。ギリシア語聖書の番号で順に、詩編第3, 37, 62, 87, 102, 142編が唱えられる。
- 4) 大連祷。
- 5) 「主こそ神」。
- 6) トロパリオン：まず復活トロパリオン、続いて祝日のトロパリオン、そして復活散会聖母讃歌（テオトキオン。～散会とあるのは、前晩晩課の末尾で歌われた讃歌と同一であるため。
- 7) カティズマとカティズマリオン。～朝課では、主日・週日を問わず通常2個カティズマが読まれる。各々の後にカティズマリオンがあり、「第1カティズマリオン」「第2カティズマリオン」と呼ばれる。

8) 「多憐歌」：9月22日から12月19日まで、および1月15日から「乳断ちの主日」までの期間中、もしくは祝日が主日に重なる際に限って歌われる。

9) 復活讃歌。～6連より成る。初めの4連の導句は詩編第119(118)編12節「主よあなたは祝された方、あなたの掟をわたしに教えたまえ」、残りの2連の導句はそれぞれ「栄光は父と子と聖霊に」および「今もいつも世々としえに」。この後小連祷。

10) ヒュパコエ：復活の日の未明、イエスの墓に向かった婦人たちのことを歌うもの。

11) 昇階唱：詩編120(119)から134(133)編、すなわち金曜の朝課にて通常唱えられる詩編(第18カティズマ)より取られた唱句。

12) プロケイメノン：後に続く福音を聞く準備の意味。

13) 福音朗読：以下に記す福音書中の11個の箇所から毎週、順に取り上げられる。

14) 「キリストの復活を目にして」。

15) 詩編第51(50)編。

16) 福音接吻スティヒラ。

17) 特別連祷。

18) カノン。～全9歌(通常は8歌)より成る。各歌の冒頭の句は「エイルモス」(8調各々に定められている。調とは、復活の主日の翌週主日である「トマスの主日」を第1調とし、「乳断ちの主日」に至るまで、主日前晩の土曜晩課からその週を通じて用いられる曲調。8種あり、第1調から順に用いられる)、また末尾の句は「カタヴァシア」(季節により定められている。聖母<通常>、降誕、洗礼、迎接、十字架の5種)と呼ばれる。第3歌の後に小連祷と聖人のコンタキオンおよびオイコス、第6歌の後に小連祷と復活のコンタキオンおよびオイコス、第9歌の前に「わが魂は主をあがめ」の聖母讃歌が歌われる。

19) 「主は聖」。

20) 「光の歌」。

21) 讃美スティヒラ。～通常は4歌。閉じの部分は「栄光は父と子と聖霊に」に続いて「福音スティヒラ」、「今もいつも世々としえに」に続いて聖母讃歌「神を産めるおとめよ」。

22) 大栄唱。

23) トロパリオン：当主日が8調のうち奇数調か偶数調かにより、2種ある中から一つを選択。

- 24) 三重連禱.
- 25) 完遂連禱.
- 26) 大閉祭.

一方、以下は祝日朝課の次第である.

【祝日朝課】（これを B とする）

- 1) 初めの祝福.
- 2) 「天のいと高きところには神に栄光」×3.
- 3) 「6つの詩編」.
- 4) 大連禱.
- 5) 「主こそ神」.
- 6) トロパリオン：祝日の次第による.
- 7) カティズマとカティズマリオン：主日朝課の場合と同様に 2 個カティズマが読まれ、それぞれの後に「第 1 カティズマリオン」「第 2 カティズマリオン」が歌われる.
- 8) 「多憐歌」：祝日には必ずこれを歌う.
- 9) 祝日讃歌．～この後小連禱，続いて「第 3 カティズマリオン」（後述）.
- 10) 「昇階唱」（「わが若き頃より」）.
- 11) プロケイメノン：祝日の次第による.
- 12) 福音朗読：祝日の次第による.
- 13) 詩編第 51（50）編.
- 14) 福音接吻スティヒラ.
- 15) 特別連禱.
- 16) カノン：第 3 歌に続き祝日のヒュパコエ，第 6 歌に続きコンタキオンとオイコス，第 9 歌に先立ち前歌.
- 17) 「光の歌」：祝日のもの.
- 18) 讃美スティヒラ．～通常は 4 歌，ないし 6 歌.
- 19) 大栄唱.
- 20) トロパリオン．祝日の次第による.
- 21) 三重連禱.
- 22) 完遂連禱.
- 23) 大閉祭.

4. 聖土曜日の特質

さて、聖土曜日は週日ではあるものの、復活の主日の前日として特異な意義を持つ。特に、先述したような「過渡性」をそのうちに秘めるビザンティン典礼にあって、「いまだ復活せざれども必ず復活す」といった聖土曜日の時間的特質は、共同体における共通理解の共有という側面を持つ典礼の次第のうえで、どのように表現されているのだろうか。

通常の主日朝課にあっては、復活を基調とする福音書の朗読がその中心部を構成する（上記 A13）。四福音書における復活の記事とは、順に

1) マタイ 28:16–20 2) マルコ 16:1–8 3) マルコ 16:9–20 4) ルカ 24:1–12 5) ルカ 24:12–35 6) ルカ 24:36–53 7) ヨハネ 20:1–10 8) ヨハネ 20:11–18 9) ヨハネ 20:19–31 10) ヨハネ 21:1–14 11) ヨハネ 21:15–25

の 11 か所である。これらが一週間ごとに順に取り上げられ朗読されるのであるが、万聖節の主日（聖霊降臨後第 1 主日）から枝の主日（受難週聖月曜日の前日）の前まで、この 11 個のサイクルが繰り返される。

では次に、聖土曜日における朝課の次第を見てみよう。その概要は次のようになる。

【聖土曜日朝課】（これを C とする）

- 1) 初めの祝福。
- 2) 「天のいと高きところには神に栄光」×3。
- 3) 「6つの詩編」。
- 4) 「主こそ神」。
- 5) トロパリオン：以下に記す。
- 6) 「エンコーミア」と「詩編第 119（118）編」の交唱。～拙稿 1】を参照。3 部に分かれ、間に各々小連祷を挟む。
- 7) 復活讃歌。～上掲 A9) のものと同一。この後小連祷、続いて「カティズマリオン」。
- 8) 福音朗読。～これはすぐ上に記した 1) マタイ 28:16–20 に等しいが、ハンガリーのギリシア・カトリック教会ではこの部分を省いていた。
- 9) 詩編第 51（50）編。
- 10) カノン。～全 8 歌。後述する。第 3 歌の後にカティズマ、第 6 歌の後にコンタキオンおよびオイコス、その後シュナクサリオン。第 9 歌の前には、AB と異なり、前歌も聖母讃歌も見られない。

11) 「主は聖」．～上掲 A19) に等しい．次第書によれば、これは「光の歌」である（下記参照）．

12) 讚美スティヒラ．～4 歌．閉じの部分は「栄光は父と子と聖霊に」に続き、聖土曜日固有の句（下記参照）、さらに「今もいつも世々としえに」に続いて聖母讚歌「神を産めるおとめよ」．

13) 大栄唱．

14) トロパリオン．～C5) の初めに歌われたものが再度歌われるが、「栄光は」以下に移らず、直ちに次の聖書朗読へと移る．

15) 旧約朗読のためのトロパリオン．

16) プロケイメノンと聖書朗読．～以上については後述．

17) 完遂連祷．

18) 大閉祭．

概括して言えば、ここには通常の祝日朝課の次第が基盤となり（あ）、適宜主日朝課の特質が盛り込まれている（い）、という印象を受ける．（あ）および（い）それぞれの典拠を記すならば、

（あ） C7) の最後に「カティズマリオン」が歌われる．聖土曜日のこの部分に「カティズマリオン」が歌われるのは、主日の特徴を示すものではなく、祝日における「第3カティズマリオン」の位置を踏襲する側面である．

（い） 1. C7) で「復活讚歌」が歌われる．これは、この讚歌が、香油を携える婦人たちに対する天使の諭し（ルカ 24：1-12）を内容とし、「空の墓」を歌うものであるが故に、聖土曜日に対して特に齟齬をもたらさないためでもある．もっとも、内容的にこの歌はすでに復活を讃えるものであり、翌復活の主日からの照らしが優先していると言える．

2. C11) で「主は聖」が歌われる．祝日には、祝日固有の「光の歌」が歌われ、「光の歌」自体は、先述した 11 箇所福音朗読と同じサイクルで主日にも歌われる．ただ「主は聖」（A19）の歌は、復活を記念する主日にのみ唱えられる．聖土曜日には「主は聖」の歌を「光の歌」として歌う、ということであり、この規則は、聖土曜日の祝日性が、復活そのものへと次第に移り行くことを示すものだと考えられよう．

3. C12) で聖母讚歌「神を産めるおとめよ」が歌われる．これは主日朝課で歌われるものであり、すでに主日性が顕わとなっている．

4. 聖土曜日に最も特徴的なのは、福音書を含む聖書朗読の位置である。これは主日朝課における場所（A13）でも祝日朝課における場所（B12）でもなく、後半部により近い場所（C16）である。そして C15）聖土曜日固有のトロパリオンの後によろやく、「プロケイメノン」に始まる旧約預言書の朗読（エゼキエル 37:1-14）、もう一つのプロケイメノンと使徒パウロ書簡の朗読（1 コリント書 5:6-8 およびガラテヤ 3:13-14）、アレルヤ、そして福音朗読（マタイ 28:1-2）という段取りにより、聖書朗読が行われる。これは聖書朗読を、翌日である復活の主日に接近させることにより、復活への期待をいや増す効果を高める次第だと言えるであろう（拙稿 1）。

ところで復活の主日における朝課では、A13) におけるような聖書朗読は、どの位置でも行われることがない。福音書における復活の記事は、復活の証言ではあっても、超自然的事実としての復活それ自体に等価ではあり得ない。したがって復活の主日には、福音朗読それ自体が行われなくなるのである。むしろ復活の主日における「聖書」については、これを「カノン」そのものが体現すると言えるだろう。

したがって、聖土曜日における聖書朗読の位置が後半に移動することは、復活の主日に福音朗読自体が行われなくなり、「カノン」が「聖書」を体現することになるという状況への接近を表現するものだと考えられる。この点で聖土曜日における「カノン」もまた、先述のような「過渡性」の象徴的空間として捉えられよう。

本稿では以下、聖土曜日の「カノン」部を中心に、ビザンティン典礼の特質の一つと言える「過渡性」を最もよく表現するのがこの聖土曜日であろうとの憶測を基に、その前後の章句を訳出紹介しつつ、神学的考察を深めることに努めたい。

5. 聖土曜日の朝課（その1：トロパリオンとカティズマリオン）

さて、前出の拙稿 1) においては、上表の C7) に載る「復活讃歌」までを収録した。もっとも C5) 「トロパリオン」については訳出していなかったため、以下に訳出する（これを ❶ とする）。

❶ 「神を畏れるヨセフは、十字架の木よりあなたのけがれなき体を取り降ろし、香油を塗って浄らかな亜麻布に包むと、新しい墓にうやうやしく安置した」。～このトロパリオンは、前晩聖金曜日より継続される主テーマである。

「栄光は父と子と聖霊に」。

「おお不死なる生命よ、あなたは死に降るとき、神性の輝きで冥府を亡きものとした。そしてあなたが死せる者どもを地下より引き上げたとき、天上の諸力はこぞって叫びを挙げた。われらの神、生命の与え主であるキリストよ、あなたに栄光あれ」。

「今もいつも世々としえに」。

「香油を携える女たちに対し、天使は墓の傍らに立ち、こう叫んだ。香油は死者たちにこそ似つかわしい。だがキリストは、腐敗とは無縁なる方であることが示された」。

聖土曜日の朝課に関して、**1】**で主に取り上げた C6) 「エンコーミア」と「詩編第 119 (118) 編」の交唱 の部分は、B7) カティズマとカティズマリオンおよび B8) 「多憐歌」に相当する位置を占める。C7) 復活讃歌に続き、聖土曜日には、上に述べたように小連祷、以下「カティズマ」、『マタイ福音書』の朗読(省略)が行われ、C9) 詩編第 51 (50) 編、C10) 「カノン」へと続いてゆく。以下、復活讃歌に続く「小連祷」の閉じの部分を出す。

「われらの神なるキリストよ、あなたは平和の王、われらはあなたに栄光を帰す。始めなきあなたの父、いとも聖にして善性に満ち、生命をもたらすあなたの聖霊とともに、いまもいつも、世々としえに、アメン」。

続いて「カティズマ」である。この部分は上の(あ)で指摘したように、聖土曜日の祝日性をよく表現する箇所だと言える。この「カティズマ」に続く「カティズマリオン」<下記②; 祝日朝課の B9) 「第 3 カティズマリオン」に相当>の訳文に関しては、拙稿 **1】**に既出であるが、本稿での考察に関わるため、以下に再度掲載しておく。

② 「浄らかな亜麻布、および神々しき香油をもって、ヨセフは畏れ多き遺体をピラトに申し出て受け取り、塗油を施した上で新しき墓に安置する。朝まだきに、その墓へ香油を携えた婦人たちは、こう叫びを挙げる。キリストよ、仰せの通り、われわれに復活を示したまえ」。

「栄光は父と子と聖霊に」。

「キリストよ、仰せの通り、われわれに復活を示したまえ」。

「今もいつも世々としえに」。

「天使たちの合唱隊は、父の懷に主が坐しているのを目にし、不死なる方がなぜ死者として墓に納められているのかに驚嘆する。天使たちの戦列は、この方を取り囲み、冥府にいる死者たちとともに、この方に栄光を献げる、創造者また主として」。

以上、①および②に関して本稿で拙訳を示したが、一見して明瞭なごとく、これらはいずれも、第1祈禱句／「栄光は」／第2祈禱句／「今も」／第3祈禱句という構成になっている。上述のように、最も明瞭な形でのこれら「三つ組」の祈禱句類は、「トロパリオン」「コンタキオン」「テオトキオン」であり、それは聖体祭儀において、福音書が奉持され堂内に顕示される「小聖入」に先立つ位置に置かれる（拙稿3）。この「三つ組」祈禱句は、拙見によれば、古典ギリシア文献の劇作品、すなわち「ビザンティン三部集」形式のうちに伝えられる悲劇・喜劇との関連のうちに語られ得る（2】3】）。女性ないし聖母が、このうちの第3集（ないし歌）の主題となるという点がその主たる根拠である。「三つ組」の祈禱句が、聖体祭儀においてこのように聖書の「小聖入」を先導する位置に置かれるという配置は、その予表論的意味上、最も示唆的だと言える。もっとも聖土曜日の朝課にあっても、①はこの朝課全体を開祭し（拙稿1】）、②は後続の「カノン」を先導する。「カノン」とは、旧約・新約の諸歌唱句を通誦することにより、聖書の中心性とその神学的展開を示す朝課の中核部である。

6. 聖土曜日の朝課（その2：カノン）

さて前掲のユーチューブ録画によれば、全体で136分ほどに及ぶ「聖土曜日の朝課」のうち、カノン部が72分ごろより始まる。まず『トリオディオオン』には次のような説明がある。

「このカノンについては、その第1・3・4・5歌はヒドゥルースの司教・修道士マルコスの作、第6, 7, 8, 9歌は聖山アトスのコスマスの作である。一方エイルモスについては、カッシアという名の女性の作である。このカノンは、エイルモスを除き、全体が折り句（アクロスティック）構成（Καὶ σήμερον δὲ Σάββατον μέλω μέγα「きょうわたしは大土曜日を歌う」）になっている」。

筆者による注を加えておこなうなら、これは1】Καὶ 3】σήμε 4】ερον 5】νδὲ 6】Σάββ（ただしΣはエイルモスに含まれる） 7】ατονμ（αはエイルモスに含まれる） 8】έλω（εはエイルモスに含まれる） 9】μέγα（μはエイルモスに含まれる）の順に、カノンを形成する計8つの歌（第2カノンを省く）を構成する4～5

個のトロパリオンの冠字が、上掲の「きょうわたしは大土曜日を歌う」になっている、ということの意味するものである。

前掲の注記には「エイルモスを除き」とあったものの、この解析から判明するように、あとから加わったとされる（コスマスによる）歌の部分については、エイルモス部を含めてようやく折句構成が意味をなす構造となることが分かる。エイルモスについては、カッシアという名の女性の手になると注記されていたが、このカッシアという人物は、このあたりの詳細に通じた才知溢れる女性であったことが推察できようし、また後半部を詩作したとされるコスマスと、何らかの意思疎通を行った上で詩作を行ったかも知れない。

カノン部については、通常の主日であれば、詳細な『メネア』（「月課経」）のうちに、当日の各「歌」部に収められたトロパリオンが多数記載されている。もっともイヴァンチョー師による『ギリシア・カトリック典礼学』には、これらを歌う習慣はすでに「大斎期間中」にしか残っておらず、「小教区での運用では、通常、カノンのエイルモスをカタヴァシアとともに歌う」とされている（Ivancsó 1999 : 243）。この聖土曜日には、カノンを構成する「トロパリオン」がすべて、省略なく歌われる。これは、聖土曜日が『トリオディオオン』に含まれていることと軌を一にする。そしてイヴァンチョー師が強調するように、このカノン部にも、ビザンティン神学特有の「三つ組風」(trichotómikus)の性質が顕著である（Ivancsó 1999 : 244）。以下、「聖土曜日のカノン」を訳出する。

1) 【出エジプト 15 : 1-8】

エイルモス。「かつて、救われた者たちの子らは、海の波で覆う者、追撃者たる独裁者を、大地の下に隠した。だがわれらは、おとめごらとして、主に向かって歌おう。なぜなら主は、誉れのうちに栄光を受けたからだ」。

トロパリオン。

① 「わが神なる主よ、わたしはあなたに過ぎ越しの讃歌、葬礼の歌を歌おう、あなたはわたしに、あなたの埋葬によって生命の入り口を開き、死をもって、死と冥府とを死せるものとして下さった」。

② 「わが救い主よ、上は玉座において、下は墓において、宇宙を超えるもの、そして大地の下にあるものが、あなたを思い、あなたの死のために献げられる。なぜならあなたの姿は、生命の最初にある死者と映り、理性を超えるのだから」。

③ 「あなたは万物を、あなたの栄光で満たすため、大地の最深部にまで降下し巡った。アダムに発するわが本性は、あなたに隠されてはおらず、人間愛に満ち

た方よ、あなたは埋葬されることにより、腐敗に満ちたわたしを刷新した」。
カタヴァシア：再度、上記の「エイルモス」。

3) 【サムエル記上 2：1-10】

エイルモス。「被造物は、あなたが支配されることなく、すべての大地を水の上に吊るすのを見た。だがそのあなたが、されこうべに吊るされているのを目にし、大いなる恐れに捕えられてこう叫ぶ。主よ、あなたを除いて聖なるものはない」。
トロパリオン。

① 「あなたは埋葬の予表を、その像を倍にすることで示した。いまやあなたは、自らの秘密を冥府に横たわる者たちにも、その主として、神人に相応しい仕方で明らかにした。人々は叫ぶ。主よ、あなたを除いて聖なるものはない」。

② 「あなたは腕を拡げ、それまで引き裂かれていたものを一つに結びつけた。救い主よ、あなたは亜麻布をまとい、墓に入ることで、縛られていた者たちを解放した。主よ、あなたを除いて聖なるものはない」。

③ 「退くことのない方よ、あなたは自らの意向により、埋葬と封印のうちに閉ざされた。けれどもあなたは自らの力を、その働きにより、こう歌う者たちに神的な形で知らしめた。主よ、人間愛に満ちた方よ、あなたを除いて聖なるものはない」。

カタヴァシア：再度、上記の「エイルモス」。

カティズマリオン。「救い主よ、兵士たちはあなたの墓を見張る間に、稲妻のために死者となった。これに対し、その姿を目撃された天使は、婦人たちに復活を告げる者となった。われらはあなたを、腐敗を打ち滅ぼす者として讃える。そして墓から復活するあなた、われらの唯一なる神に屈拝する」。

「栄光は父と子と聖霊に。今もいつも世々としえに」。

～再度「カティズマリオン」。

— . . . —

4) 【ハバクク書 3：2-19】

エイルモス。「十字架のうちなるあなたの神的な無化を予見したハバククは、驚きのうちにこう叫んだ。善き力よ、あなたは権力者たちを打ち砕き、冥府にいる者たちに、全能者として手を差し伸べた」。

トロパリオン。

① 「かつて、あなたが業の休止をもって聖とした7日目の日を、あなたは今日

聖なるものとした。なぜなら、わが救い主よ、あなたは安息日を守ることによって万物を新たにし、新たに創造し、刷新したからだ」。

② 「あなたの霊魂は肉体から離れたとはいえ、あなたはいと高き方の力により、勝利を収めた。なぜなら御言葉よ、あなたは死と冥府という、二つながらの鎖を、自身の力により打ち砕いたからだ」。

③ 「御言葉よ、冥府はあなたと出会い、あなたが全能であるにもかかわらず人の姿を取り、血の塊が染みになっているのを見て、その姿のおぞましさに愕然とする」。

カタヴァシア：再度、上記の「エイルモス」。

5) 【イザヤ書 26：9-20】

エイルモス。「キリストよ、神なるあなたの顕現は、われわれへの共苦ゆえに生じたもの。その陰なき光をイザヤは目にし、夜明けまだきにこう叫びを挙げる。死者たちは蘇り、墓のうちに眠る者たちは目を覚ますであろう。そして地に住む者たちはみな、大いに歓喜するであろう」。

トロパリオン。

① 「あなたは、御言葉よ、人を新たにするために、創造主ながら土となり、亜麻布と墓とが、あなたとともにある神秘を顕らかにすることとなった。なぜなら神を畏れる議員は、あなたを産んだ父、あなたのうちに驚くべき仕方でわたしを新たにされた方の意向を成し遂げたからだ」。

② 「死を通じて死性を、埋葬を通じて腐敗性を、あなたは変容させた。なぜならあなたは、外にまとった人間性を不死なるものとするので、最も神に相応しい仕方で腐敗せぬものとなったからだ。なぜなら主よ、あなたの肉体は腐敗を知らず、あなたの霊魂は、驚嘆すべき仕方で、冥府に赴いてもそこに留め置かれることがなかったからだ」。

③ 「わが創造主よ、あなたは処女を通じて生まれ出で、わき腹を槍で貫かれることにより、そのわき腹からの新たな誕生を創り上げ、エヴァの誕生を刷新し、超自然的な仕方で眠りから覚めて新たなアダムとなった。あなたは生命をもたらす眠りから蘇り、全能者として、眠りと腐敗から生命を呼び覚ました」。

カタヴァシア：再度、上記の「エイルモス」。

6) 【ヨナ書 2：3-10】

エイルモス。「ヨナは、大魚の腹の中に閉じ込められたものの、圧死させられは

しなかった。というのも彼はあなたの予型を担い、苦しみを受けて埋葬を被り、あたかも部屋から出るかのように獣の中から脱出し、番兵にこう声を掛けたのだ。むなしく虚偽なるものを見張る者たちよ、あなた方は自らへの憐れみを棄て置いた」。

トロパリオン。

① 「御言葉よ、あなたは生命を奪われつつも、あなたが与った肉から分かれたることがなかった。というのも受難の際、あなたの神性と肉よりなる神殿は崩壊したものの、それでもあなたの本性は一つだったのだから。あなたはその双方において、神の御言葉として、神と人であり、唯一なる子」。

② 「アダムの過失は、人を殺すものとはなったが、神を殺すものではなかった。なぜならあなたの肉体は、その土質なる本質のために苦難を被ったが、その神性は無受苦のまま留まったからだ。あなたは自らの可腐敗性を不腐敗性へと変容させ、復活を通じて、自らが腐敗せぬ生命の泉であることを示した」。

③ 「冥府は、人という死すべき種族の上に王として君臨するが、永遠なるものではない。なぜなら力ある者よ、あなたは墓のうちに安置され、生命を統べるその腕により死の門を打ち砕き、永遠の昔より冥府に横たわる者どもに、偽りのない贖いを告知して初子としての救い主となった」。

カタヴァシア：再度、上記の「エイルモス」。

コンタキオン。「深淵を閉ざした方が、死した姿で見られる。没薬と亜麻布に包まれ、不死なる方が、死せる者として墓の中に安置されている。婦人たちはこの方に香油を塗るためにやって来て、激しく嗚咽しつつこう叫ぶ。この日こそ、いとも祝せられる安息日。キリストはこの日、眠りから覚め、三日目に復活する」。

オイコス。「万物を統べる方は十字架の上に高くされ、すべての被造物は嘆きの声を挙げる。この方が十字架の木に裸で吊るされるのを目にして、太陽は自らの光線を隠し、星は自らの光を閉ざす。大地は大いなる怖れに取り乱す。海は去り、岩は砕け散る。多くの墓は開かれ、聖なる者たちの亡骸は目を覚ます。地下では冥府が呻く。ユダヤ人たちはキリストの復活を秘すべく談義する。だが婦人たちはこう叫びを挙げる。この日こそ、いとも祝せられる安息日。キリストはこの日、眠りから覚め、三日目に復活する」。

メネアのシュナクサリオン。「聖にして偉大な安息日に、われわれは神の体の埋葬と、われらの主にして救い主であるイエス・キリストの冥府への降下を祝す。これらを通じてわれらの種族は、腐敗から永遠の生命へと呼ばれ、変容を遂げる」。

スティコイ。「番兵よ、あなたは墓を見張るが、それは虚しい。生命そのものである方を、墳墓が押し留めておくことはあり得ない」。

「すべての日々のうち、聖なる四十日間は卓越している。さらにこれらの日々のうちでも、聖にして偉大な第四日は格別である。そしてこの日よりさらに偉大なのが、偉大なる聖週間である。さらにこの大聖週間に対しても、この偉大にして聖なる土曜日は優っている。この一週間が「大」と呼ばれるのは、これらの日々が時間的に長いからではなく、むしろこの間に、とりわけ今日この日に為されたわれらの救い主の業が、超自然的で驚きに満ち、人知を超えるためである。というのも世の初めの創世の際、神はすべての業を完遂し、最後に頂点を極める業として6日目に人間を創造し、7日目には自らのすべての業を終えて休息した。かくしてこの日を聖なるものとし「安息日」（サバト）と名づけたのである。この語は「安息」の意と解される。こうして神は思惟界の業にあっても、すべてを最上の仕方で行い遂げ、6日目には、いまだなお腐敗に満ちた人間を創造した。だが神は、生命をもたらす十字架と死を通じて人間を新たにし、再びこの第7日に諸々の業の完全な休息を終え、生命と救いをもたらす眠りを摂った。かくして神の御言葉は、肉を帯びたまま墓に降った。そして自らのけがれなき神的な靈魂を伴い、冥府に降ったのであるが、この靈魂は死によって、肉体からは分かたれた。そして主はこの靈魂を父の手に委ね、自らの血をも、求めることのなかった父へと献じ、この血がわれわれのための贖いの代となった。というのも主の靈魂は、他の聖なる者たちの靈魂と同じようなかたちで、そこに留めおかれるということがなかったためである。これはどうしてだろうか。主の靈魂が、かの聖者たちの靈魂のように、先祖たちの呪いを被らなかったということだろうか。否むしろ、われらの敵なる悪魔は、たとえわれわれを留め置いたにせよ、われわれが買い取られることになった主の血を受け取ることはしなかったためである。では盗人である悪魔が、神から受け取ることばかりでなく、神その方を捕らえたままにしていることをも差し控えたのはどうしてだろうか。それはわれらの主なるイエス・キリストが、肉体的にだけでなく、神性を伴い、完全に肉と一体となったままで墓の中に住まったためである。主は、樂園で盗人とともに過ごしたが、伝えられるところによれば、冥府でも盗人とともにあり、そこでは主の靈魂が目に見えたという。彼処で主は、超自然的な仕方で行って父そして聖霊とともに協議に与っていた。なぜなら主は、言葉に尽くせぬ神として、場所の限定を受けることなく遍在し、その神性は、十字架上でまったく苦難を被ることがなかったのと同様、墓の中にあってもまったく受難を経験しなかったからである。そして主の亡骸は腐敗に打

ち勝った。腐敗とは、靈魂の肉体からの離脱だからである。もちろん肉の解体、また身体の完全な消滅を意味する腐食とも無縁であった。だがかのヨセフは、主の聖なる亡骸を取り降ろし、ユダヤ人たちから遠くない園の新しい墓に埋葬し、非常に大きな石を、墓石の入り口のところに置いた。実にユダヤ人たちは、準備の日にやって来て、ピラトにこう言っていた。〈主よ、わたしたちは、あの惑わし者が生前に「わたしは3日目に蘇る」と言っていたのを覚えています。ですからあなたの権限において、番兵に墓を見張るように命じるのが良いと思われまゝ〉。だがもし惑わし者であるのなら、なぜ「生前に」なのか、表現をよく考えてみるがよい。間違いなく、彼は亡くなったのだ。「わたしは蘇る」と、彼は何時言ったのだろうか。おそらくユダヤ人たちは、ヨナによる先例を用いて、このような表現を編み出したのかも知れない。もし墓が見張られていて、盗まれたのであれば、彼らはまったくの愚か者たちである。おお、何と愚かな者たちであることか。この件に関して彼らが取った行動、それは彼ら自身にも矛盾する行動であり、それを彼らは認識していないのだから。だが彼らは、ピラトの命令を受け、自ら番兵団を遣わして、墓の封印を固くし、墓の見張りを徹底させた。これはもちろん、見張りや封印にもかかわらず、主の復活が論駁され得ないかたちで行われたことの証である。だが冥府は、キリストの力がかなり強力であったことに気づき、いまだになお引きつけを起し痙攣している。冥府はキリストを不当にも飲み込んだがために、間もなく吐き出しはしたものの、封印の石があまりに強力だったこともあり、永遠の昔からその腹に備えられている者たちを食物としているのだ」。

「われらの神なるキリストよ、言葉にし難きあなたの共なる降下により、われらを憐れみ給え、アメン」。

—・—・—

7) 【ダニエル書3：26-45, 52-56】

エイルモス。「言い表し難き驚異よ！ かまどの中にあつた敬虔なる子供たちを、この方は炎の中から救い出した。それは墓の中に死者として、息も立てずに安置されていた方。この方が、こう歌うわれらを救いへと導く。神よ、あなたは贖い主、あなたは祝された方」。

トロパリオン。

① 「冥府は、わき腹を槍で貫かれた方をその心臓部に受け取り、神的な火の力により消尽して崩壊した。それはわれらの救いのため。われらはこう歌う。贖い主なる神よ、あなたは祝された方」。

② 「幸いなる墓よ！ この墓は、自らのうちに眠れる創造主を受け入れ、生命の宝庫と化して神的なるものと呼ばれた。それは、こう歌うわれらの救いのため。贖い主なる神よ、あなたは祝された方」。

③ 「死せる者たちの掟に随い、あなたは万物の生命であるにも関わらず、墓での安置を受諾して、この掟が目覚めのための泉であることを示した。それは、こう歌うわれらの救いのため。贖い主なる神よ、あなたは祝された方」。

④ 「キリストの神性は、冥府にあって分たれることなく、墓にあって、エデンにあって、一つのままであった。それは、父そして聖霊とともに、こう歌うわれらを救いへと導くため。贖い主なる神よ、あなたは祝された方」。

カタヴァシア：再度、上記の「エイルモス」。

8) 【ダニエル書 3：57-88】

エイルモス。「天よ、身を震わせ震撼せよ、大地の礎石は揺れ動くがよい。見よ、いと高き処に住まう方が死者のうちに数えられ、狭隘な墓にもてなされる。この方を、汝ら子供たちは祝すがよい。祭司らは讃歌を献げるがよい。汝ら民は大いに崇め奉るがよい、世々としえに」。

トロパリオン。

① 「けがれなき神殿は崩壊しつつ、倒れた幕屋を立て直す。なぜならいと高き処に住まうあなた、第二のアダムは、かつてのアダムの許、冥府の最深部にまで降下したからだ。この方を、汝ら子供たちは祝すがよい。祭司らは讃歌を献げるがよい。汝ら民は大いに崇め奉るがよい、世々としえに」。

② 「弟子たちの蛮勇は止んだが、アリマタヤのヨセフは豪勇を発揮した。彼は、万物を統べる神の死した裸の亡骸を目にし、これをもらい受けて、嘆きつつ葬礼の儀を施したのだ。この方を、汝ら子供たちは祝すがよい。祭司らは讃歌を献げるがよい。汝ら民は大いに崇め奉るがよい、世々としえに」。

③ 「おお新しき驚異！ おお善性の溢れ！ おお言い表し難き忍耐！ なぜならいと高き処に住まう方が、彷徨える者となって自ら地の下に封印され、神であるのに難詰された。この方を、汝ら子供たちは祝すがよい。祭司らは讃歌を献げるがよい。汝ら民は大いに崇め奉るがよい、世々としえに」。

カタヴァシア：再度、上記の「エイルモス」。

9) 【ルカ福音書 1：68-79】

エイルモス。「母よ、わたしのことを嘆き給うな。あなたはわたしを墓の中に見

出すが、そのわたしとは、種蒔きもされることなくあなたが子として胎内に宿したものの。わたしは蘇り、栄光を受ける。そして神として、信と希望のうちにあなたを讃える者たちを、止むことなく栄光のうちに高めよう」。

トロパリオン。

① 「始めなき子よ、驚くべき仕方であなただを産んだとき、わたしは陣痛を逃れ、超自然性に与り幸いなる者と言われた。今や、わが神よ、あなたが死者として息もせずにいるのを目にし、わたしは痛みの剣に激しく刺し貫かれる。だがわたしがいと高きものとされるべく、蘇りたまえ」。

② 「自らの意志に随うわたしを大地は覆うが、冥府の番人たちは、わたしが裁きの血に染まった衣に包まれているのを目にして震撼する。母よ、わたしは神として、十字架のうちに敵を平定し、再び蘇りあなたをいと高き者とする」。

③ 「被造物は歓喜せよ。地に住む人々はこぞって悦べ。敵である冥府は打ち滅ぼされた。婦人たちは香油を携えて墓へ向かうがよい。わたしは万人の祖であるアダムを、エヴァと共に贖い、三日目に復活しよう」。

カタヴァシア：再度、上記の「エイルモス」。

C表に示したように、第9歌の後に「主は聖」(C11)が歌われるが、これは既述のように「光の歌」(A20)を覆うものである。続いて「讚美スティヒラ」(C12)、そして「大栄唱」(C13)へと移る。以下に「讚美スティヒラ」を訳出しておく。聖土曜日における「讚美スティヒラ」は、詩編第150編のうち、初句である「神を讃えよ、その聖所において。神を讃えよ、天の力強き蒼穹において」を外し、次の4句(ABCD)をもって「導句」としつつ、これに下記の誦句を交える形式で形成されている。

A「神を讃えよ、その力ある業において。神を讃えよ、その卓越した偉大さにおいて」。

「今日、その掌で被造物を包含する方を、墓が収めている。石が覆うのは、その徳により天空を覆う方。生命が眠り、冥府は震撼し、アダムはその鎖から解放される。あなたの経綸に栄光あれ、あなたはその経綸を通じて、永遠なる安息を完全に成就した。われらに、死者からのいとも聖なるあなたの復活を賜って」。

B「神を讃えよ、角笛の音に合わせて。神を讃えよ、琴と豎琴を奏でて」。

「この目に映る光景は一体何だろうか。今ここに現存する休らいは何なのだろうか。永遠の王が、苦難を通じて経綸を完遂し、墓のうちに安息を得て、われら

のために新たな安らぎを提供する。この方に向かってわれらは叫びを挙げよう。神よ、世を裁き蘇り給え。あなたが永遠に王として世を統べんがため。あなたは、計り知れぬほど豊かな憐れみの持ち主なのだから」。

C「神を讃えよ、太鼓と舞踏をもって。神を讃えよ、弦と笛によって」。

「見よ、われらは自らの生命が、墓に横たわるのを目にする。これは主が、墓に横たわる人々を生ける者とするため。見よ、今日、ユダより出でた眠れる方の姿を。われらは預言者のごとくにこの方に向かって叫びを挙げよう。あなたは獅子のごとくに、倒れ伏して眠る。王よ、誰があなたを目覚めさせるのだろうか。むしろあなたは自ら蘇り給え。われらのために、進んで自らを献げた方なのだから」。

D「神を讃えよ、シンバルの響きをもって。神を讃えよ、勝利のシンバルによって。すべてのものよ、神を讃えよ」。

～次の句より、調が変じて第2調から第6調となる（以下③とする）。

③「ヨセフはイエスの亡骸をもらい受け、主固有の新しい墓に安置した。なぜなら主は、その墓から、あたかも小部屋から出てくるかのごとくに出で来るのが必然であったから。主は死の力を打ち砕き、人類に樂園の門を開いた。あなたに栄光あれ」。

「栄光は父と子と聖霊に」。

「今日という日を、神秘的な形で、偉大なるモーセはこう述べて予表した。＜神は今日というこの7日目を祝福した。なぜならこの日は祝された安息の日であり、これは安らいの日であるから＞（創世2:3-4）。この日、神の御ひとり子は自らのすべての業を終えて休息し、死をめぐる経綸を通じて肉に安息を与えた。そして復活を通じ、存在者である方に向けて再び立ち上がり、われわれに、唯一人間愛に満ちた善き方として、永遠なる生命を賜った」。

～この歌は、聖土曜日の晩課においても歌われるものであり、この箇所は、通常の主日朝課であればA21)のように「福音スティヒラ」が唱えられる部分である。

「今もいつも世々としえに」。

～これに続くのは、通常の主日朝課でも唱えられる誦句であり、ここに至って聖土曜日の朝課は、通常の主日朝課と同じく、A21 聖母讃歌で締め括られることになる。

「神を産める処女よ、あなたはいとも祝された女性。なぜならあなたから肉を受けた方を通じて、冥府は囚われの身となり、アダムは召され、呪いは亡きもの

となり、エヴァは自由の身となり、死は死したものとなり、われらは生命ある者となった。それ故われらは讃歌を声上げて叫ぶ。われらの神である主、このように喜びを伝える方は祝された方、あなたに栄光あれ」。

聖土曜日に特徴的なのは、この後に、前掲した「神を畏れるヨセフは」のトロパリオン（①のうち初句）、および旧約預言書に先立つ「プロフェティコン」（ないし「預言書のトロパリオン」）を介した後、既述の如く、ようやく「プロケイメノン」以下の聖書朗読・福音朗読が行われる点であった。「プロフェティコン」についてもすでに 1】の中で訳出を終えてある。福音朗読の後、聖土曜日も、完遂連祷（C17）から閉祭（C18）に向けて、通常の主日朝課と同じ順序を踏む。

7. 展望と結論

本稿で特に注目したいのは、白抜き数字で表した①②③のそれぞれの部分に関してである。既発表の拙稿 3】および 2】においては、古代ギリシア悲劇および古代ギリシア喜劇の「ビザンティン三部集」（アイスキュロス：『縛られたプロメテウス』『テバイ攻めの七将』『ペルサイ』； ソフォクレス：『アイアス』『エレクトラ』『オイディプス王』； エウリピデス：『ヘカベ』『オレステス』『フェニキアの女たち』； アリストファネス：『富』『雲』『蛙』）という三つ組による作品群が、ビザンティン典礼、特に聖体礼儀に明瞭に認められる「トロパリオン」「コンタキオン」「テオトキオン」という三つ組の讃歌の構成と通底性を持つのではないか、という点を指摘した。本稿で扱ったのはビザンティン典礼の朝課に関してであり、朝課の「規範」はもちろん、復活祭主日の未明における「復活徹夜祭」であるが、聖土曜日の朝課も、「御言葉の沈黙」を扱うという点で、これに劣らぬ深い神学的意味を有していた。

この神学的意味は、究極的に「安息」がいかなる位相において捉えられているか、という点に集約されよう。上で③のうちに訳出した句（「この7日目という日、神の御ひとり子は、自らのすべての業を終えて休息し、死をめぐる経綸を通じて肉に安息を与えた」）のうちに認められるように、「安息」というものが、神の第2位格と言える神の「言葉」において捉えられるとき、それは神の沈黙、そして「御言葉の死」となって表れる。だが「御言葉」たるイエスのうちにも三位性が見出されるがゆえに、彼の神性自体は死滅することがなく、不滅の神性が「肉」に休息を与えた、とする解釈がここに表明されている。

上述したように、通常の主日朝課における中心部は「福音朗読」（A13）とされ

る。これは間違いのない点ではあるが、既述のように、聖土曜日には年間でただ一度、この「福音朗読」の位置が後ろに移動して翌復活の主日側に動く（C16）。「カノン」が、福音を含めた聖書全体を体現すると表現されるに適う位置取りは、この聖土曜日の次第のうちすでに明瞭である（C10）。㊦をも含め、聖土曜日における「三つ組」の祈词句類は、聖書全体を体現する「カノン」の前後に配されている（C5, C7, C12）。このような「三つ組」の祈词句類は、「三部集」形式のうちに伝えられる古典ギリシア悲劇・喜劇を象徴的に意味し、「御言葉」としての聖書を支える役割を帯びるとする筆者の持論（拙稿 2】3】）は、「カノン」が聖書を体現すると解するならば、より妥当性を有するものとなるであろう。

最後に、本稿で指摘してきた「過渡性」について付言しておきたい。ビザンティン神学における終末観は、1 コリント 15:28「万物が御子に従うそのときには、御子自らも、万物を御子に従わせた方に従う。これは神が、すべてにおいてすべてとなるためである」に最も明確に表明されている（秋山 2020）。「子の死」を承けた聖土曜日の時空間は、この終末における状況を表すものではない。「神がすべてにおいてすべてとなる」という状況は、あくまでも、キリストが聖霊として、生ける人間に内在することにより「復活」を完遂し、その人間が父の意向を体現することを示すものである。聖土曜日にあつて、聖書朗読と福音朗読とが残存しつつも、むしろ「カノン」部が聖書自体を体現する位置に置かれ、その前後を三位一体なる神性の象徴的表現である「三つ組」の祈词句が支えるという空間構造は、「いまだ復活せざれども必ず復活す」という、聖土曜日の「過渡性」を最もよく表現する特徴の一つと言えるであろう。

【参照文献】

秋山 学 2022a 「エルサレムの朝課」をめぐって—「エンコーミア」を中心に—『文藝言語紀要』（言語篇）80（掲載頁未定）。

秋山 学 2022b 「ビザンティン典礼の構造と喜劇詩人アリストファネスの「ビザンティン三部集」—夜半課の祈禱を基点に—」『文藝言語紀要』（文芸篇）81（掲載頁未定）。

秋山 学 2021a 「大バシレイオスによる詩編唱和の内的意義—詩編第 119 (118) 編を中心に」『中世思想研究』63, 5—20。

M. Akiyama 2021b “A Process of Reconciliation: An Interpretation of Aeschylus’ “Byzantine Triad” in consideration of the theological background around that time” (Oral

Presentation in the International Online Conference by the Ivane Javakhishvili Tbilisi State University, Institute of Classical, Byzantine and Modern Greek Studies, 2021.09.24).

秋山 学 2020 「ビザンティン三部作をめぐって：古典学と神学のあわい」『藤花のたわむれ：久保正彰先生の卒寿を祝して 第I巻 久保正彰先生卒寿記念論集』135-158, Bibliotheca Wisteriana.

秋山 学 2010 『ハンガリーのギリシア・カトリック教会—伝承と展望—』創文社.

Ivancsó István 2000 *Görög katolikus szertartástan*, Nyíregyháza.

Ivancsó István 1999 *Görög katolikus liturgia*, Nyíregyháza.

Orosz Atanáz 1998 *Nagyböjti Énektár vagyis A három ódás bünbánati énekek könyve, amely a szent nagyböjten végzendő összes szent szolgálatot tartalmazza*, Nyíregyháza.

Τριώδιον 1856 Venezia, <http://digital.lib.auth.gr/record/126142> より入手 (ファイル6およびファイル7). 最終閲覧日 2021年12月13日.